

組（

春はあけぼの。

やうやう白くなりゆく、山ぎは少しあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

夏は夜。

月のころはさらなり。

やみもなほ、蛍の多く飛びちがひたる。

また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。

雨など降るもをかし。

秋は夕暮れ。

夕日のさして山の端いと近うなりたるに、鳥の寝所へ行くとして、

三つ四つ、二つ三つなど飛び急ぐさへあはれなり。

まいて雁などの連ねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。

日入り果てて、風の音、虫の音など、はた言ふべきにあらず。

冬はつとめて。

雪の降りたるは、言ふべきにもあらず、霜の白きも、またさらでも、

いと寒きに、火など急ぎおこして、炭もて渡るも、いとつきづきし。

昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も白き灰がちになりてわろし。

春は夜明けが（

空がだんだん白くなっていくうちに、山ぎわの空が少し明るくなり、紫色になった雲が細くたなびいているのがいい。

夏は夜が（

月が出ている夜はもちろんいい。

やみ夜でも、蛍がたくさんとびかっているのはすてきだ。

また、ほんの一匹二匹がほんのりかすかに光ってとんでいるのも味わいがあっていい。

雨の日もまた味わい深い。

秋は夕ぐれどきが（

夕日が赤くさして山のりよう線にしずもうというところに、カラスがねぐらに帰ろうと

三羽四羽、二羽三羽とまとまって急いでとんでいくのもしみみしていい。

まして、かりなどが列を連ねてとぶすがたが、遠くに小さくみえるのも、とてもすてきだ。

すっかり日が落ちて、風の音や虫の音などが聞こえるのも、言うまでもなくいい。

冬は早朝が（

雪がふっているのは、もちろんいいし、しもが真っ白におりているのもいいし、そうでなくても、

とても寒い朝に、急いで火をおこして、炭火を持ち歩くすがたも、冬の朝の風景にふさわしい。

昼になって、寒さがゆるんでくると、火おけの炭火も白い灰のほうが多くなって、みつともない。

○日本語の教科書を見ながら、音読しましょう。（二回）

○（ ）には、どんな言葉が入るでしょう。

○あなたが一番気に入っている季節や時間をしようかいしましょう。